

SHOW HEY シネマルーム

★★★

ジャスト・マリッジ

配給/20世紀フォックス映画

2003 (平成15) 年10月28日鑑賞

<試写会>

Data

監督: ショーン・レヴィ

脚本: サム・ハーパー

製作: ロバート・シモンズ

出演: アシュトン・カッチャー/ブ

リタニー・マーフィ/クリス

チャン・ケイン

👁️👁️ みどころ

最初の出会いでビビビ・・・ときた若い二人はたちまちゴールイン。しかし楽しいはずのハネムーンはトラブル続き。地獄のハネムーンとなった。「結婚まではいい関係だったのに・・・」と思っても後のまつり。さあ、二人の美男美女が演ずる楽しいロマンティック・コメディを理屈抜きで楽しもう。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ビビビ・・・の出会い>

トム (アシュトン・カッチャー) はラジオ局で交通情報を流しているキャスター。超イケメンで大のスポーツ好き。サラ (ブリタニー・マーフィ) は大金持ちの父親を持ち、大きなお屋敷に住むキュートなお嬢様。実際の年齢も、アシュトン・カッチャーは26才、ブリタニー・マーフィも27歳と若いですが、映画の設定では2人の年齢はもっと若い。

トムとサラが知り合ったのは全くの偶然。海岸でアメフト遊びをしていたトムのボールが、愛犬を連れて散歩していたサラの頭を直撃したのだ。「大丈夫かい?」とかけ寄ったトムと「大丈夫よ!」と答えたサラは一目でお互いにビビビ・・・。たちまち恋におちた。

<ちょっとしたハプニング>

ラブラブの2人だが、どうもやっていることは「愛している・・・」と言って、「キスをして・・・」、そして「・・・してばかり」の様子。昔流の日本の見合い結婚システムのように、お互いをよく知るための交際をあまりやっていない。果たして「愛してる・・・」というだけの「魔法」で、2人の結婚生活はうまくいくのだろうか・・・? 幸せな2人だったが、ある日ちょっとしたハプニングが・・・。

読書中のトムのズボンの裾にまわりつくのは、サラの愛犬のボックス。ボックスはト

ムに遊んでもらいたかったらしい。しかしトムは読書に夢中。「いい加減にしろ・・・」、「ボールでも追いかけて遊んでろ!」と言って、ボールを放るとボックスは勢いよくこれを追って行った。ところがボールは開いていた窓の外に……。だからボックスもこれに続いて……。その直後、外では車の急ブレーキの音が……。

愛犬ボックスの死を聞いて泣きじゃくるサラを、トムは必死のつくり話で慰めたが、どうもその話はウソ臭い……。

<たちまちスピード結婚。しかし・・・>

サラの父親や兄弟たちは若すぎるサラの結婚に反対。特に父親はポーランド系の貧乏人トムでは、愛する末娘の結婚相手として全く気に入らない。サラの結婚相手としては、父親の事業を手伝っているピーター（クリスチャン・ケイン）の方が漸然ふさわしいわけだ。

しかしサラはこんな家族のところにトムを連れてきたうえ、いきなりの「結婚します宣言」だ！驚きながらもやむをえずこれを祝福する父親、母親、そしてピーター。

コメディタッチの映画だからすべて笑いゴトで済むものの、シリアスなドラマなら、とことん深刻になっていく、世間によくあるテーマだ。もちろんトムは有頂天だったが、気になったのは、ここではじめて知らされたピーターの存在。「仮に僕と出会わなければサラはピーターと結婚するつもりだったのか?」、「果たして2人の仲はどこまで進んでいたのか?」、「セックスはしたのだろうか・・・?」トムは大いに気がかりだった。

こんな状況だったが、さすがアメリカは民主主義の国。サラの固い意思が尊重され、2人はめでたくゴールイン。

<見モノは地獄のハネムーン>

2人のハネムーンはヨーロッパ。

トムは貧乏人だが、サラの父親は大富豪。アルプス山麓の古城ホテルは中世のお城そのもの。もちろんスイートルームだ。ここから次々とおこるハプニングがこの映画の見どころだが、それをここで紹介したのでは、映画の面白さが台なし。それは映画を観てのお楽しみだ。下手をするとドタバタ喜劇になってしまいそうな地獄の展開を若い2人がユーモラスに、しかしリアルにうまく演じている。

トラブルを増幅させ、お互いがキレてしまうことになったのは、トム側は「赤のブラジャー事件」、サラ側は「ピーターとのキス事件」とだけ紹介しておこう。なお、この地獄のハネムーンの出来事は、この映画の脚本を書いたサム・ハーパーの体験談をもとにしたものとのこと。だからバカバカしいと思いつつ、現実味がある……?

<プロローグとエピローグ>

プロローグは、ハネムーンから帰った最悪のケンカ状態の2人の姿。まさに陰悪そのも

の。もちろん口もきかないし、いじわる合戦だ。なるほど2人ともまだ若い……。サラを家まで送り、サラの荷物を放り出すや、トムは即退散だ。

しかし映画のエピローグは……？

予想されるとおりのハッピーエンドだが、それには私が『キューティ・ブロード ハッピーMAX』（2003年）の映画評論で書いたように、ここにも「弁論の国」アメリカの姿がある。私としては、そこに十分注目してもらいたい。

<注目の若手スター共演のとにかく楽しい映画>

トムを演じたアシュトン・カッチャーはカルバン・クラインの下着モデル等で、大人気を得ているハンサムボーイ。ブラッド・ピット、レオナルド・ディカプリオに続く若手イケメンスターになる可能性十分だ。

他方、サラを演じたブリタニー・マーフィは『サウンド・オブ・サイレンス』（2001年）で、精神を病んだ少女という難役を演じていた女優だ。また、私は観ていないが、『17歳のカルテ』（1999年）や『8 Mile』（2003年）にも出演した実力派、演技派だが、この映画ではキュートな役柄を楽しく演じている。メグ・ライアンに続くロマンティック・コメディの女王を目指す女優は、『メラニーは行く！』（2003年）のリース・ウィザースプーンなどたくさんいるが、若さとキュートな美貌、そして本格的な演技力からいけば、ブリタニー・マーフィがその本命かもしれない……。

こんなロマンティック・コメディを楽しむには理屈は不要。何も考えず、アハハと笑って楽しめばいい。前述の「赤のブラジャー事件」と「ピーターとのキス事件」も、ホントのことさえ分かれば、笑ってすませることができるというものだ。

また、ハネムーンでの数々の「地獄」も、2人の愛さえあれば「楽しい思い出」になるものさ……。ジャンジャン。

2003（平成15）年10月29日記